第12課　彼らはあなたの家で何をみましたか

【暗唱聖句】

「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです」第一ペテロ2：9

【日曜日・王の過ちから学ぶ】

紀元前700年頃のユダ王国の王であったヒゼキヤは、アハズ王の時代に盛んであった偶像崇拝の払拭に務め、土着神の神殿を取り除き、国の宗教の純粋性を回復させた王としてよく知られています。しかし、イスラエルの歴史の中では優れた王として評価されることが多いヒゼキヤも、過ちを犯します。それは高慢の罪でした。長らく苦しめられてきたアッシリアに対して、主が御使いを遣わして敵を全滅してくださったり、ヒゼキヤが重篤な病気に死にそうになったときにも癒してくださったにも関わらず、神様の恵みを忘れて、自分の手柄のように思い上がってしまうのです。

「主は御使いを遣わして、アッシリアの王の陣営にいる勇士、指揮官、将軍を全滅させられた…それ以来、王はあらゆる国の民から仰ぎ見られるようになった。そのころ、ヒゼキヤは病にかかり、死にそうになった。彼が主に祈ったので、主は彼にこたえ、しるしを与えられた。しかし、ヒゼキヤは受けた恩恵にふさわしくこたえず、思い上がり、自分とユダ、エルサレムの上に怒りを招いた」歴代誌下 32章21～25節

また、バビロンから使者が送られてきたときのことでした。両国にとって共通の敵国であったアッシリアと、共闘するためにバビロンから使者が遣わされたと思われますが、このときもまるで自分の力を誇示するように、国中にある宝や武器などあらゆるものを見せます。神様を証すべき良い機会だったにも関わらず、自分に栄光を帰したのでした。このことは主の御心ではありませんでした。その結果が、以下の御言葉です。

「神はヒゼキヤを試み、その心にある事を知り尽くすために、彼を捨て置かれた」歴代誌下32：31

「王宮にあるもの、あなたの先祖が今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らなくなる日が来る、と主は言われる」イザヤ39：6

さらに、

クリスチャン家族の祝福は、神様を知らない人にとって大きな関心となることが少なくありません。それは良い証のチャンスです。しかし、そのときに自分や家族を誇ってしまうことのないように注意したいものです。

【月曜日・家庭第一】

自然に福音を伝えるべき場所は、それぞれの家庭です。家族はまだ信仰を持っていないのなら、家庭以上に重要な伝道地はありません。イエス様の最初の弟子のひとりであったアンデレは、家に帰るとすぐに兄弟シモン（ペトロ）にもイエス様に会うようにと誘います。兄弟や姉妹から誘われて教会に行くようになったという証は今でもよく耳にすることです。

子どもに対する伝道に対して、親は何もしなくても自然に神様のことがわかるだろうと思い込んでしまう場合があります。しかし、大人も聖書の学びを常に続けていかなければわからないことが多いように、子どもも同じです。親の姿や教会生活を通して信仰を学んでいくのは確かですが、それだけでは不十分であることは、実際に子どもに尋ねてみるとすぐにわかることでしょう。子どもに信仰を学ばせることを通して、親自身の信仰も成長させられます。

ルツとナオミの物語は、家族内における伝道の一例について証しています。ルツはモアブ人でしたが、ナオミの信仰を見て導かれていきます。しかし、ナオミは信仰者として完璧だったというわけではありませんでした。夫に先立たれ、二人の息子まで失ってしまい、失意のうちにルツと共に故郷に帰った時、ナオミは自分の名前の意味が快いという意味であったので、人々にマラ（苦い）と呼んでくれと言い、「国を出て行くときは、満たされていたわたしを主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い（ナオミ）などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ、全能者がわたしを不幸に落とされたのに」と付け加えたのでした。それにも関わらず、ルツはナオミの信仰を受け継ぎます。その時点で、ルツはナオミを通してではなく、直接神様につながるものとなっていたのでしょう。この実例は、完璧な信仰者でなくとも、家族を導くことはできるということです。きっかけを与えれば、後はやがて、本人と神様との問題となっていくからです。

【火曜日・勝利する平和】

「なぜなら、信者でない夫は、信者である妻のゆえに聖なる者とされ、信者でない妻は、信者である夫のゆえに聖なる者とされているからです。そうでなければ、あなたがたの子供たちは汚れていることになりますが、実際には聖なる者です」第一コリント7：15

夫婦揃って信者であれば良いのですが、そうではないケースのほうが実際には多いです。その場合の聖書の教えとして、この御言葉ほど希望に満ちた言葉がありません。妻あるいは夫のどちらかが信者であることで、伴侶は聖とされており、2人から生まれた子どもも当然、聖なる者なのです。そのような目で信者ではない家族を見つめる目が大切です。しかし、もし信者ではない夫あるいは妻が家を出ていくな、次のように勧告されています。

「しかし、信者でない相手が離れていくなら、去るにまかせなさい。こうした場合に信者は、夫であろうと妻であろうと、結婚に縛られてはいません。平和な生活を送るようにと、神はあなたがたを召されたのです」第一コリント7：16

わたしたちは平和な生活を送るようにと神様から召されました。だから、平和を作り出す者として信者は家族のために祈らなければなりません。しかし、それでもなお夫婦の問題が絶えず、相手から出ていくのなら、離婚もやむをえずで、結婚に縛られてはならないと言います。また、暴力を振るわれた場合、それにいつも耐えるのが聖書の教えでもありません。わたしたち信者が仕えるのは、伴侶ではなく、イエス様です。この点も忘れてはならない重要なポイントです。平和な生活を送ることが神様の御心なのです。

【水曜日・家庭生活は分かち合うために】

「そこで、あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい」コリントの信徒への手紙一4章 16節

「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい」エフェソの信徒への手紙5章1節

「そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり」テサロニケの信徒への手紙一1章 6節

人は模範となる人があると、その影響を少なからず受けるようになります。キリスト教の信仰において、信者は家族内においてよき模範とならなければなりません。また家族だけでなく、周囲の人たちに対しても模範となることが求められます。さらにまだ信仰の未熟な人たちに対して、パウロのように「わたしに倣う者となりなさい」と言える信仰者でありたいものです。

　しかし、わたしたちは完全な者はいません。信仰経験が長くなれば、初心者に比べれば聖書のこともわかってきますし、品性の実りを見ることもできるでしょう。しかしだからといって完璧な信仰者かと問われれば、誰もそうですと言うことはできないでしょう。だから、「わたしに倣うものになりなさい」という言葉は、なかなか言えるものではありません。ただ、信仰者が見せられる信仰というのは、弱さも含めてです。つまり、神様に頼らなければ何もできない弱さや罪を抱えていることも含めてです。それゆえ、神様を求め祈る、そのような姿を倣ってほしいということでもあるのです。パウロが「わたしに倣う者となりなさい」と言いながら、同時に「神に倣う者となりなさい」と言っています。つまり、神様に倣おうとして生きている自分を見習ってほしいということなのです。　このようなクリスチャンとしての隠し事のない真摯な生き方が、他の人にも影響を与えることになるのです。

【木曜日・人に広がりやすい友情の中心】

「目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して言った。「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」その人たちは言った。「では、お言葉どおりにしましょう。」」創世記18：1～5

アブラハムとサラは三人の旅人（本当はイエス様と天使）が家の前を通りかかった時、丁寧にもてなしました。旅人をもてなすというのは、当時のユダヤの社会では大切なことと考えられていたようです。親切心もあったでしょうし、他の地域の情報を得る機会ともなったようです。このようなもてなしに対して、イエス様は次のように語られました。

「そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』・・・そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』マタイ25：34～40

イエス様は困っている人や小さい者に対して優しくしてあげるのは、わたしにしたのと同じであると言われました。伝道の働きにおいても、このような精神で関わっていくことが大切です。